

「夏、暑かったあの日」

「夏、暑かったあの日」

シロ

白くぼやけた視界。小さかった瞳に映っているのは、一番よく知っていた人物。その人は何かを言っていた。とても嬉しそうに。とても楽しそうに。

シンク口するように、体の一部が悲鳴を上げる。誰かに殴られたわけでもないのに。突き刺さるような感覚。砕けた硝子の破片で心臓を抉られるように、深く。

言われた事にただ答えていた。とても楽しそうに。とても嬉しそうに。

聞こえていなかったはずの音が鮮明に響く。目が霞むほどの光が一瞬だけ通る。

「……になるんだ！」

冒頭の言葉を、頭が拒否して受け付けなかった。聞きたくもなかったから。

蝋燭の火は最後の一瞬輝いて消えていく。だから、もう消えていいんだろう。

ようやく、この世界からのブラックアウト。

「死ぬ」

とりあえず、そんな言葉を呟いておく。耳元では、少し前に流行っていた音楽がけたたましく鳴っている。

どんな歌詞だったかなあ。夢とか、希望とか、そんなことを唄っていたっけ。寝起きの頭で考えつつ、携帯に触れる。最近の携帯は何分かするとまた鳴り始めると言う画期的機能がついてたりする。普段なら気持ちよく二度寝するのだが、そんな気分にはなれなかった。とりあえず五月蝓いアラームを切る。

畳六畳しかないぼろアパートにはエアコンなど付いていない。「強」のスイッチを押してある扇風機は横になり意味のない場所へと首を振っていた。

一人暮らしのため、何の警沢も言えない。だが、人間が暑さに勝てるはずもない。とりあえず、寝ている間に蹴り飛ばした扇風機が原因に違いない。苛立ちながらスイッチを切ると、太陽が占拠した世界から蝉の声が耳に入り込む。小さかった時も同じような声を聞いた記憶が蘇る。あの頃はまだ……。

「腐ってんのかな……」

一度溢れ出た記憶の流れは、しばらくの間止まってはくれない。見たくないものさえ見えてきてしまう。

思考を一旦止め、冷蔵庫を開けた。飲みかけの牛乳と、輪切りにしてあるトマト、後は調味料とか、ラップに包んである冷えたご飯。自転車を漕ぐのでさえ面倒になるこの時期にしてはまだ中身がある方だ。ひどい時は何も

入っていない。

よく冷えたトマトを一つ摘まんで口に運ぶ。乾燥していた喉に爽やかな酸味と水分が供給される。気がつく和二切れ目に手を伸ばしていた。冷蔵庫の前でもそもそと一体何をしてるんだろうか。

そんな姿を想像すると少し切なくなる。料理もアパートに移り住んだ当初はしっかりと作っていたものなのだが、今では面影すら消えてしまった。

右手に付いた水分をタオルで拭き、牛乳を一口含む。これにて朝飯終了。なんと物質だ。

しかし、暑さが尋常ではない。窓を開け網戸の状態にしても、入り込むのが熱風では何の意味もない。扇風機もそれに然りだ。

こんな時は図書館に行くに限る。クーラーは効いてるし、夕方までやっている。大学の課題をこなすにはもってこいの場所だ。そうと決まればすぐに出かけねばなるまい。同じような考えを持つ学生は多いからだ。

あまり大きくないショルダーバックに入るだけの物を詰めていく。とはいっても、途中からサボり出すから大半は意味を成さないのだが。ほら、あれだよ。気持ち。気持ちの問題ってやつ。

服を物干し竿からひったくり、着替える。袖にどうにか左腕通す。こんなことを繰り返すから左の袖だけ伸びてしまった。汚れの目立つ靴を履き、玄関を飛び出す。

直後に太陽からの洗礼を受ける。

げんなりしつつ、自転車の鍵を開ける。後、二、三分もすれば天国へとたどり着くのだ。それまでの辛抱だ。帽子を鞆から取りだしかぶっておく。

体の火照りが最高潮に達する頃、自動ドアという天国への道が開く。

いつもより早く着いたおかげか、席には空きがある。適当に場所を見つけて座る。その頃にはもう汗は止まっていた。

顔を拭いたタオルを鞆へ押し込み、変わりに教科書やら参考書を引きずり出す。ついでに音楽プレイヤーも。右しかない耳かけタイプのイヤホンを差し込む。

プレイヤーから流れる音楽を聴きつつ、書物を捲る。他人の邪魔にならぬよう、音量は低めにしてある。そのせ

いか教科書を捲る音や、ノートを書き取る音、冷房の上げる音が耳に入りこむ。
「……まあ、いつか」

悪魔の誘惑に負けて、音量を何段階か上げた。

「最悪だ」

周りに迷惑をかけた俺に対する神様の罰なのだろう

か？ それとも運が悪いだけなのか。

夕方になって図書館を出た俺が見たものは悲劇だった。ちやんと止めておいたはずの自転車が綺麗になくなってた。鍵も掛けてあったはずなのに、その残骸が無残にも転げ落ちていた。わざわざチェーン式の鍵をぶっ壊してまで自転車を盗まないでもらいたい。

ここで他人の自転車で乗って帰る方法もあるが、結果としてまた誰かが盗まれたことになる。

ため息をつきつつ、また帽子を被った。陽はもうほとんど出ていないが、念のためだ。というか、灰色の嫌な雲が空を埋め尽くしている。帰るまでもってくれるだろうか？

つけっぱなしのプレイヤーから、リピートされた唄が流れてくる。多少うなだれながら歩き出してみると、唄以外に鳴る音がする。

目をわき道に向けると、緑色の両生類が勢いよく鳴いていた。やはり雨は近いのか？

アパートから図書館へは川沿いの土手を使うと一直線の道となる。途中何箇所か橋があり車の往来があった。車とまでもいなくてもバイクがあれば大分楽なだけだ。いや、自転車ですら結構危ういと言うのに、バイクになど危なくて乗れないか。

湿った空気が頬を伝う汗となる。タオルで拭ってもすぐにまたあふれ出す。

いつもは自転車ではばす道を踏みしめていくと、犬の散歩中のおばさんや、ランニング中のおっさんと出くわす。犬の散歩は分かるけど、おっさんは倒れたりしないのだろうか。若者がへばるにはまだ早いということか。そういえば、さっきのおばさんは手に傘を持っていた。土手から見える他人のペランダでは、誰かが急いで洗濯物を取り込んでいる。嫌な予感しかししない。

当然のようにそれは当たってしまい、全体の二分の一程進んだ所で、空から轟音が響く。一斉に雨粒が地面と突進してくる。

冗談じゃない。このままではさぶ濡れだ。暑さから解放されるからいいかもしれないが、このままでは靴に入っている物が使い物にならなくなる。こなしした課題がおじゃんになってしまう。何処かで弱まるのを待つしかないだろう。

重い足を上げ走り出すと、こういう時だけは運がいいのか、すぐに雨宿り出来そうな場所を見つける。土手から下り、橋の下へともぐりこむ。しかし、そこには先客がいた。

橋は大きく、何人でも入れるだろうが、先客は雨宿りのためにここに居るわけではなかった。

背丈は低く、きつと親にやってもらったのである。坊主頭。薄いランニングに短パン。手にはグローブをはめ、壁に向かって一生懸命ボールを投げ込んでいた。

とりあえず、危害はなさそうなので放っておくとしよう。この場所なら雨は完璧に防げる。後は止むのを待つだけだ。

少年は一度こちらを見るが、またすぐにボール投げを開始する。しかし、コントロールがめちゃくちやで、少年の元にボールが返ってくることはない。何度か繰り返される内に大きく反れたボールが、此方に飛んでくる。右手でそれを反射的に掴む。ボールはゴム製で当たっても痛くはない物だったが、つい取ってしまった。

「ご、ごめんなさい！」

少年はかなり慌てながら走りよってくる。何時間もこんな所にいたのだろうか？ 全身汗まみれだった。

「大丈夫だよ。ほら、気をつけな」

ボールを返してやると、少年は深くお辞儀をして、繰り返し同じ動作をしていた。

その姿は何処かで見えた記憶があった。左腕の付け根が痛む。

今の自分はあるなかに夢中になって何かが出来ているんだろうか。とつくに忘れてしまったんだろうか。しばらくの間考えこんでいた。

ふと、頭部に何かがぶつかる。言うまでもなく柔らかい球体で、離れた所から謝る声があった。そしてまたボールを手取る。しかし、今度はさっきと違う行動をしてみた。ボールを返さずに少年の元へと近づいていく。

どうやら怒っているのかと勘違いされたらしく、こわばった表情をした。そんなことをする人間に見えてしまふのがちょっと悲しい。緊張を解くために笑ってやる。

「いいか、もつと肩の力を抜いて」

ひさしぶりの投球フォーム。あの事故から三年。左手でもうボールを取ることは出来ないが、右手で投げることはまだ出来る。取れないことはないんだが、キャッチボール程度の話だ。

体は今までの体験をまだ覚えていらっしゃるらしく、ボールは指から離れると直進し、壁から返ってくる。

「こう、だ。分かったか？」

「うん！」

少年は安心したのか楽しそうにしている。その表情はどこか懐かしい。

「お前、一人でこんなことやっつてんのか？」

「……誰も僕とはやっつてくれないから。でも、やりたいから……」

「そうかい。ほれ、一遍投げてみ」

「うん……あつ……！」

少年の顔色が変わる。目線は左手にあった。血が通っていない冷たい手。指は動かないが一応ある。

「ん？ どうした？」

分かって一応聞く。俺から話し出すのはどうも気が引ける。

「夏、暑かったあの日」

「あの……左手……」

「義手ってやつ。気にすんな」

まあ、気にするなっていう方が無理な気もするが。

すぐに出来るわけがなく、少年のボールは何度やっても真つ直ぐ飛ばない。それでも俺の話を聞いて、真剣な顔で取り組んでいた。

「なあ、練習して、どうすんだ？」

無意識で聞いていた。過去の俺がそこにいた。

「野球選手になるんだ！」

ふと、自分の姿が投影された。もしかしたら、こいつは小さかった頃の俺なのかな？ いや、そんなはずはないんだけど、気がしたんだ。

「じゃあ、ここで上手くなってみな。そしたらみんなと出来るだろ？」

問いに少年は力強く頷き、またボールが手から離れていく。夕立はとっくに止み、空は赤く染まり始めていた。

それから数日後。アパートに荷物が届いた。実家の倉庫に入れっぱなしにしてあった道具だ。それをあの小さな靴に入れ、入りきらないものは担いだ。自転車がないため歩きだが、今日は気分が高揚していた。暑さすら気にならない。

目的の場所に着くと、そこにはやはり先客がいた。
「キャッチボールしようぜ」

太陽が狂うほど笑っていた夏の一日。